

福島における被災者支援の 実際と今後の課題

後編

除染土が入った袋。同様の袋が南相馬市内で散見される。

地元FPが草の根で取り組む 地域住民へのコンサルティング

今後の生活を自ら選択できるように 考え方のヒントや支援制度を提示

東

日本大震災から5年目を迎えた今も、福島県には

避難生活を余儀なくされている住民が大勢いる。被災者の悩みを探るべく、本特別レポートの前編では、福島第一原発から30km圏内に本部を置く、あぶくま信用金庫「お客様サポート室」の取組みを紹介した。後編となる今回は、福島県でFP活動を続けるネクストライフ・コンサルティングの佐藤光一さんと、NPO法人いわきFP・eーらいふの取組みをレポートする。

「自然の中でのびのびと子どもを育てたい」。その夢をかなえるため、ネクストライフ・コンサルティングの佐藤光一さんは

1996年に福島県南相馬市に移住してきた。南相馬市は気候が穏やかで食も豊か。当時勤務していた会社の関連会社があったこともあり、この地を選んだ。

その後、佐藤さんは仕事で培ったプログラミングやITの知識と自ら取得したFP資格を活かし、事業と家計のトータル管

理を提案するコンサルタントとして独立。中小零細企業やSO

HO事業主に対し、ITコーデイナーとして家計の側面から、FPとして意識したコンサルティングを行ってきた。

主要な営業エリアは南相馬市と、その南に位置する双葉町や富岡町。徐々にお客さまも増え、事業が軌道に乗ってきたころ、東日本大震災が発生した。

佐藤さんも震災直後は新潟へ避難。その後、自宅のあるエリ